

活動報告：ミュージックチャイルド

1. 「ミュージックチャイルド」について

広島文化学園大学・短期大学子ども・子育て支援研究センターでは、平成22年度より特別な支援を要する幼児、小学生を対象とした音楽療法活動「ミュージックチャイルド」を定期的に行っている。本活動の目的は、音楽のもつ生理的・心理的・社会的作用を用いて、生活の質の向上などを目的とした音楽活動を意図的、計画的に行うことで、子どもの発達を支援するものである。「ミュージックチャイルド」では対象児の行動の変容や発達の促進を引き起こす手段として音楽を仕様するということと共に、協調性を育て、対象児の発する音楽表現やその他の表現を受け取り、コミュニケーション能力の促進及び、望ましい行動を促す音楽活動を行っている。

子ども・子育て支援研究センター開設初年度は、音楽学科の音楽療法を専門とする教員と子ども学科の小児看護を専門とする教員の2名が担当となり、希望される児童保護者との面談を行い、週1回約30分の音楽療法を実施した。23年度からは、音楽学科「音楽療法実習Ⅰ」の見学実習先として、24年度からは音楽学科3年次の科目「音楽療法実習Ⅲ」の学外実習先の一つとしてもその機能をスタートさせた。

2. 25年度の実践状況

平成25年度の「ミュージックチャイルド」で行った音楽療法活動の主な内容は前年度同様、保護者への聞き取り、インテークセッション、音楽療法アセスメント、目標設定、実施計画の作成、セッション実施、実習指導、保護者とのカンファレンスである。

音楽学科2年次「音楽療法実習Ⅰ」の見学施設としての機能も引き続き担っており、25年度は6名の履修生が見学実習を行った。重信真由美非常勤講師の実施する児童を対象とした音楽療法セッションを、隣室にてマジックミラー越しに観察、記録することで、3年次に行う学外実習に向けての基礎知識を習得させることを目的として実施した。25年度の「音楽療法実習Ⅲ」履修生は、7名で、学生は、2名又は3名が1グループとなり担

当する児童への音楽療法を実施した。学生は、担当教員の指導のもと、担当する児童の状態を把握するためのアセスメントを実施し、その結果をまとめ、その結果に基づいた目標を設定することを学んだ。目標に沿った具体的な活動計画の作成後は、実際に児童と出会い、インターン音楽療法士及びコ・セラピストとしての立場で音楽療法を実施した。活動終了後には、保護者への簡単な説明と情報交換の時間を設け、また教員は保護者との連携をとるためのサポートを行った。

「ミュージックチャイルド」での実習は毎回実習助手によって録画されており、翌週の「音楽療法実習Ⅲ」の授業時間でビデオを見ながら学生は自己の動きを客観的に捉え、児童の反応をより詳細に観察し記録することに役立たせた。なお、録画された活動の様子は、プライバシー保護の観点から、指導終了後に教員が消去した。

25年度の活動回数は、前期7回、後期7回の合計14回で、月別の実施回数は、4月1回、5月2回、6月2回、7月2回、10月2回、11月2回、12月2回、1月1回である。活動は主として小学校の休みを利用し、土曜日の午後、音楽療法演習室にて行われた。

参加児童の年齢、性別、障害は以下の通りである。9歳児3名、12歳児1名、13歳児1名、14歳児1名の計6名のうち4名が女児、2名が男児である。参加児童が抱える障害は、自閉症、てんかん、重度知的発達遅滞、広汎性発達障害、学習障害、知的障害である。参加児童全員が前年度からの継続である。

3. 保護者の声

保護者へのアンケート調査より、以下のような感想をいただいている。本活動による継続的な支援が強く望まれている事がわかる。保護者の生の声を以下に紹介する。

【保護者の感想より】

- ・細々であっても継続していただきたいと思います。音楽療法を通じて音楽、感覚、知識そして身体の機能、いろんな学習が楽しく出来るのだと実感しました。
- ・「ミュージックチャイルド」は子どもにとって、音楽を通じて楽しむこと、五感を通じて感覚を鍛えることに役だっています。

- ・知識（大小、強弱、左右など、物の名前だけでなく抽象的な概念）を実体験を通じて認識し学習が出来る。そして何より、本人の良いところを見つけ、自己肯定感をもてるように関わっていただけることで、本人にとって大好きな音楽が出来、母も癒される活動です。是非是非、何らかの形で継続を希望しています。
 - ・この活動が、大学生さんにとって、有意義なものになっていないのでしょうか？それとも経費とか大学の方針の問題でしょうか？やめられる理由も知りたいと思います。学生さんはどう感じておられるのかな？とも。
- 実習で、学生さんと関わらせてもらっている時は、お互い良い影響をもらっている様な気がしていました。

4. 実習指導の立場から

（非常勤講師 重信真由美）

これまでお世話になった子どもたちやそのご両親に、まずは心から感謝申し上げたい。

ここに来られていた親御さんの多くは、活動が単純に自分の子どもに良かれという動機だけでなく、この子達が生きていく社会の担い手になっていく学生たちを共に育てたいという気持ちまで持って参加してくださっていた。だからこそ、実習の試行錯誤でおぼつかない活動も暖かく見守り、子どもたちのありのままの姿を包み隠さず学生たちに伝え、時には活動の感想や子どもへの接し方のアドバイス等も声かけていただき、自分の子どものみならず、学生の成長も共に喜んでくださっていた。

活動終了後、卒業生とのエピソードを一つ紹介したい。

Tちゃんのお母様から、活動終了後突然メールをいただいた。内容は以下のとおり・・

《最近Tが児童デイから帰ってきて、「Yさんに会った！Sさんと会った！」て、言ってたんです。実習で半年お世話になったYさんとSさんが大好きだったから、思い出したのかなあと思っていたら、今日児童デイから送ってきてくださった職員さんを見てびっくり！Sさんなんです。児童デイに就職されたからよろしくとは聞いていましたが、うちの子が通ってるところに配属されたなんて知らなくて、嬉しくなってメールしまし

た。》

その後も、度々メールいただき《Sさんが今日は送ってこられて話したんですよ。頑張っておられて、親元はなれて自炊してるって偉いですよね。ちゃんと食べてる？て聞いたら、お弁当も手作りして通ってるって。他の職員さんも感心しておられて・・・。》とか、《今日はデイで音楽会があってYさんがフルートもってきてふいてくださったらしいです。Tが「Yちゃんフルート吹いた！」って、嬉しそうに報告するんです、》など。

たった、10回に満たない実習の出会いにも関わらず、卒業後の学生たちをまるで自分の子のように心配し、成長を喜んでくださる様子には感謝の思いを新たにしました。

実際、学生たちがこうして児童デイを就職先にした動機のひとつは実習を通じて出会った子どもたちとの喜びを交えた体験があったと思うし、「子どもたちのために何かしたい」という思いだけでなく、「活動のなかでいかされている自分との出会い」は大きかったのではないと思う。学生の就職先は児童福祉分野に限ったことではないが、こうした外部の親子との活動を通して、障害を持った人たちの理解と音楽療法の実践を学ぶだけでなく、誰かのためにと働くことが、実際はその人たちに自分がいかに支えられていることを実感することで、真の意味での共生の理念を学び、卒業後につながるアイデンティティの確立へとつながっていることに指導者の立場からも学ぶところの多い一年だった。

5. 改善点と将来構想

25年度をもって「ミュージックチャイルド」の活動も4年間が過ぎた。音楽療法実習先としても機能している本活動は、初めての卒業生を出すことで1クールを迎えたように思う。

開始時から、子ども・子育て支援センターを利用する地域に住む多くの保護者から問い合わせをいただき、相談を受けてきた。「発達に問題がある」とまではいかずとも、親は子の成長について何だかの不安を抱えているものである。発達に問題を抱える子どもは今後増え続けることが予想され、医療機関等で処方される薬物療法他、様々な療育・療法が必要になっている。音楽療法は、その一つのオプションとして、今後も期待され続け

るだろう。

前年度同様、問題点としてセッション実施の時間調整と回数の確保が挙げられる。本活動は授業の一環であるため、どうしても授業スケジュールや大学行事に予定を合わせることになる。また、対象児童も体調等の変化によって欠席せざる負えない事も多いのが現状である。

最後に、「ミュージックチャイルド」が行われている現場では、担当教員、学生、対象児童とその活動を見守る保護者が向きあい、数値化できない小さな進歩を共に喜びあう暖かなコミュニ

ティーが出来上がっているように思う。保護者の声からも分かるように、「ミュージックチャイルド」の活動が、発達支援を必要とする児童にとって大切な成長へのチャンスになっており、保護者の活動に対する期待と継続への希望も強い。学生にとっても、長期的に一人の児童と音楽を通して関わり、悩みながらも共に成長する貴重な場所となっている。少しでも長く、本取り組みが継続され、地域の子供達の発達を支援し続けることを願う。

(文責：学芸学部 音楽学科 狩谷 美穂)